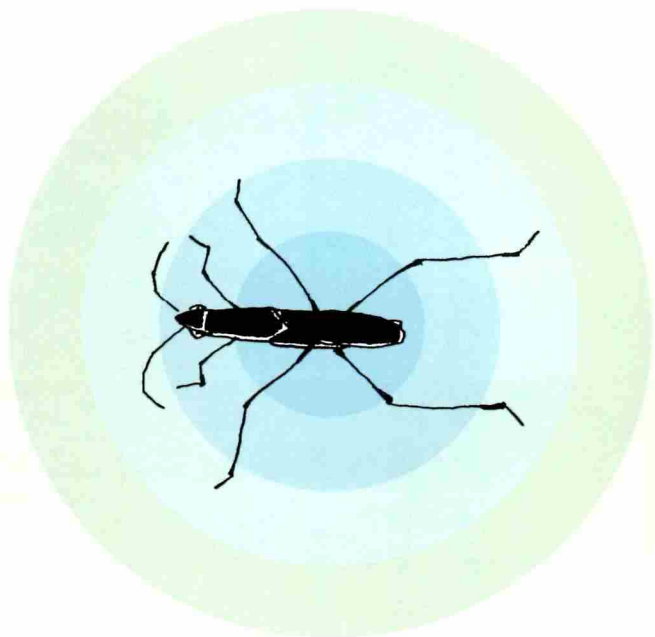


# 7. 水の中のむし



## アメンボ (アメンボ科)

●よく見られる時期 3月～10月 ●大きさ 11～16mm



(写真は幼虫)

アメンボの春は早く、水ぬるむころ、<sup>か</sup>枯れ草の<sup>えっとう</sup>越冬場所から市内の池や川にいち早く姿を現します。<sup>まえあし</sup>前脚は短く、<sup>なかあし</sup>中脚や<sup>あし</sup>後ろ脚は長く、水の<sup>ひょうめんちょうりょく</sup>表面張力を利用して、4本の脚で<sup>すべ</sup>滑るように動きます。

水面に落ちた昆虫などをとらえて、体液を吸います。

つかまえると、水あめのような<sup>あま</sup>甘く<sup>こ</sup>香ばしいにおいがすることから、この名がつけました。<sup>はね</sup>翅を持っていて飛ぶこともできます。

## コマツモムシ (アメンボ科)

●よく見られる時期 5月～10月 ●大きさ 7～8mm



水の中

後ろ脚が長く、大きくこの2本の脚を、まるでボートのオールのように使って、腹を上にして泳ぎます。プールシーズンの前の掃除などのときに付近の水辺から飛んで来て、プールに住みついているのを見かけます。

# タイコウチ (タイコウチ科)

●よく見られる時期 5月～10月 ●大きさ 20～30mm



千里川の下流は川岸に草がおおいがぶさり、生き物の隠れ家かくがに良い場所が残っています。そんな場所にひっそりと生活しています。豊中では「幻まぼろしの虫」と呼ばれるほど、ほとんど、見られない虫のなかまです。

前脚まえあしがカマのようになっていて、太鼓をうつバチをもったかっこうです。この前脚で、小魚やオタマジャクシをとらえて体液を吸います。腹の先に、胴体と同じくらいの長さの管くだがあります。これを水上に出して水中でも呼吸することができます。

## ミズカマキリ (タイコウチ科)

●よく見られる時期 5月～10月 ●大きさ 40～50mm



水草の茎に下向きに止まって動いていないときには、枯れ草と見まちがいがいそう。まるで忍者が竹筒をくわえて水中に潜<sup>ひそ</sup>んでいるように、空気の通る管を水面に出して呼吸します。

川岸の草むらの繁<sup>しげ</sup>みにかくれていて、小魚などが近づくとカマをすばやく使って獲物<sup>えもの</sup>をつかまえ、針のような口器<sup>こうき</sup>を突き立てて体液を吸います。

## コシマゲンゴロウ (ゲンゴロウ科)

●よく見られる時期 5月～9月 ●大きさ 12mm



ゲンゴロウは腹の先から空気を取りこみ、<sup>ぜんし</sup>前翅と腹の間に空気をたくわえ、水中で呼吸しています。あわがなくなると、また水面におしりを出してあわをつけます。

数年前に、猪名川の岸辺の水草のしげみで採集することができましたが、現在は見かけることが少なくなりました。

成虫、幼虫ともに肉食性で、ほかの虫や小魚をとらえて食べます。

## カゲロウの一種

●よく見られる時期 7月～8月 ●大きさ 8～12mm



卵から2週間ほどで幼虫になります。幼虫は1～3年に十数回脱皮して亜成虫せいせいちゅうになります。亜成虫は1日で脱皮して成虫になります。「カゲロウの命」は短く、1日で交尾、産卵して死にます。そのため、はかないものの例に用いられます。

幼虫は千里川などの川の瀬の砂や礫れきのある底、学校のプールなどにもすんでいて、珪藻けいそうなど水中のコケを食べます。

成虫は、光に集まり飛び交います。

## トビケラ的一种

●よく見られる時期 4月～9月 ●大きさ 17mm



成虫は夕方に現れ、明かりに飛んで来ます。幼虫は水中にすみ、小石、砂つぶ、植物片などを組み合わせて作り、その中にひそみ、流れてくる藻類そうるいなどを食べます。